東方銀月伝

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方銀月伝

【Ｎコード】
Ｎ６９３５Ｖ

【作者名】
リョク

【あらすじ】
銀色の侍、白夜叉と言われた侍は大切な人達に囲まれながら息を引き取った……
だが目を開けると知らない天井だった。
そして自分の大切なものを守る為に生きていく……

生まれ変わっても自分は見失うな

病院の部屋に一人の老人が居た。
その老人の周りには老人の子供、孫、ひ孫……そして喧嘩仲間、くされ縁の人が居た。
そして彼の妻も彼の傍に居た……
彼の人生は波乱万丈だった、戦友とは道を違え殺し合いをした……
……
大切な先生を失い戦争に出て、沢山の仲間を失った……
子供の頃には一人で屍の身包みを剥ぎ、一人で生きてきた。

そんな彼にも、沢山の守りたい物が出来た。

突っ込みをよくする眼鏡しか存在価値が無い駄眼鏡に暴飲暴食の天人、暗黒物質（ダークマター）を作る貧（バキャッ！
ストーカーをするゴリラに犬の餌……もといマヨネーズが大好きな男にドS……
戦友でもありうざいヅラに宇宙生物……
数え切れないほど沢山の腐れ縁が居た……

ピーー

無機質な音が病室に響いた……

「（じゃぁな……てめーら……）」

老人は薄くなり若い姿になる、そして消える。
暗い道を歩き、光が差す方に……
ずっと歩き続け、一人の男が居た。

「……銀時……久しぶりですね」
男は銀時を見ながらそう言った……

「……松陽先生……」

男の名は吉田松陽、銀時の恩師……

「銀時、貴方はここに来るべきじゃない……貴方の行く道はあっちです」

松陽は指を向けた、そこは暗く何も見えない場所……だが本能的に分かる、とても暖かい場所だった。

「行きなさい銀時、私はいつでも貴方を見守っていますよ」

松陽の体は薄くなって消えていった。

「松陽先生……」

銀時は少し考えた……

「……分かったよ、行ってみるか……」

銀時は再び歩き始めた。

銀時ＳＡＩＤ

「おぎゃあっ！ほんぎゃあっ！！」

アレ？ここ何処？つかこんなの前にもあったよな……

つか、なにこの声……ガキの泣き声？

「生まれましたよ！元気な男の子です！！」

嘘？マジデ？マジなのかおいっ！！

「……貴方……」

「ああ、刹那……」

マジかよ！！！もしかして転生しちまったっ！！？つかなんで！！

「名前はどうする？」

「それは決まってるわ、輝夜……それがこの子の名前よ」

誰か～、嘘だと言ってくれぇエエエエエエエエエエ！！！

人のコンプレックスはむやみやたらに言うもんじゃない！（前書き）

ＰＣ禁止を喰らってました。
今日から更新再開です！

人のコンプレックスはむやみやたらに言うもんじゃない！

あれから三年……

取り合えず恥辱に塗れた日々だったとでも言って置こう。

言いたくねぇよ！！ヅラとかに知られたら絶対に笑われる！！でもヅラとかも同じ目にあったら……まぁ同情はしとくけどよ……

しかも生まれた家がかなり高貴な家系で前じゃ信じられないくらいの生活をしている、ただ食事が全て桃……

嘗めてんじゃねぇよ！！肉を食わせろ！！魚を食わせろ！！こちとら卵かけご飯が主食な胃拡張娘とは違うんだよっ！！

生まれたところが月だからしいんだがよぉ、ふざけんじゃねぇええええええええ！！！

俺は何か！！？かぐや姫の立場なのか！！？でも俺は男だぞ！！ホモにはなりたくないんだよ！！

この体になってから良い事なんて天パじゃなくなったくらいじゃねぇか！！！顔は女顔な上童顔なんだぞ！！

「ウオリャァァァアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

そして俺は何時もどおり憂さ晴らしに木刀でサンドバッグ（と言う名の練習相手）を滅多打ちにした。

永琳ＳＡＩＤ

「また……ですか……」

はぁ……輝夜様は一体何人倒せば気がすむのかしら………と言うより本当に子供なの？よくパチンコ行ったり地上の小豆を桃に乗せたり………

でも周りからの評判は良いし、でもなんか王家では兄弟達とそりが合わなくなって………妹さんは別だけど………

「分かりました……後は私が何とかしときます……」

「はい、分かりました」

そう言って出て行く部下の人………

「はぁ～～～～～～～～～～～………」

私は溜息を吐きつつ目の前の書類―（と言う名前の始末書）を片付けていた。
そして唐突にこう思った……

自分の弟子とどっちが強いのだろうか？

流石に輝夜はまだ三歳、だが剣の腕は既に達人と呼ばれた剣士を一撃で屠っている、その小さな体の何処にそんな力があるのだと言いたいし、調《解体、もしくはドロドロ》べたい……

「取り合えず試してみますか」

そう言うと電話を取りある所に連絡した。
そして十分もしないうちに二人がやってきた。

「如何したんですか永琳師匠」

「何かあったんですか？」

「ええ、輝夜様の事でちょっと……」

「「またですか……」」

二人も同じような表情を浮かべている。
どうやらこの二人も同じような噂を聞いているのだ。

「まぁ、貴方達に二つ……お願いしたい事があるの」

ＳＡＩＤ依姫

「えーっと、なにこの状況？」

今目の前で変な表情を浮かべている輝夜……
そして私は竹刀を持っている……つまりあれか……戦えってことですね師匠……
ですが私は負けませんよ！！いくら相手が天才児と言えども年季が違いますよ！！
「取り合えずどう言う事？」

天才説明中

「ハァ～？ふざけんじゃねぇ！！勝手に決めんじゃねぇよ！！」

師匠、説明してなかったんですか！！？

「勝手に決めやがって……だから婚期逃「どういう意味かしら？」イエ、何デモアリマセン！！」

師匠……今のは大人げないのでは無いですか？

つか、私達も婚期逃してない？いや、月人だから……でも永琳様はもうすぐで一億……あれ？比べる対象がありえなくネ？

「まぁ取り合えず、綿月依姫ＶＳ蓬莱山輝夜やるわよ～」

「お姉さま少し黙っててください」

「何で？永琳様の年齢は私達より遥かに上ってことは既に分かりきってるのに」

「……アトデ少シ話シマショウ豊姫様」

あ、お姉さまの死亡フラグが今たった

「まぁ取り合えずやるわよ」

私がそう言ったら輝夜はすっごい嫌そうな顔をした。

「えー、いーよそんなの、輝さんこれから俺の心の蝋燭に火を着けに行くんだから」

「パチンコね」

「駄目ですよ、つかそんな穢れが多いところに行ってたんですね……」

改めて再教育をしたほうがいいと思いました。
つか、子供なのになんでそんな場所に入れるんですか？本当に不思議ですよ私は……

「まぁいいわ、じゃぁちゃちゃっとやっちゃって」

永琳様はそう言うとお姉さまを連れてどこかへ言った。
その後悲鳴が聞こえたが誰だったかは言うまでもない。

いくらなんでも子供相手に本気出すとか大人気なくない？

「はぁッ！！！」

――――――一閃ッ！！

木刀で放たれる一撃とは思えないほど重く、とても清廉な一太刀だった。

事実当たった場所は切り裂かれていた、つか木刀で切れる？普通

「オイオイオイ！！！あぶねぇじゃねぇか！！！」

輝夜がジャンプしながら言う、そして木剣を振り下ろす……その一撃で道場の床が壊れた。

「貴方のも危ないじゃないですか！！そんな体でよくこんな力が出ますね！！」

子供ではありえないほどの力、今は体が子供なため剣が荒い、だが常に最善の手を打ってくる。
そして……

「それに私の木刀を最初で叩き折るつもりの貴方には言われたくないですよ！！」

そう、戦いにおいて武器の破壊や紛失などは圧倒的に有利になる、素手のエキスパートならともかく武器を使うエキスパートならば破壊された時点で戦闘を行う事が不可能に近くなる。
ただしそれを行う方法はかなり厳しいしそれだけの力が必要だ。
子供だからこそ今はひびが入る程度、だからこそもう少し年を取った時、歴史に残るほどの剣士になる事になる。

「は！！」

「うォッ！！？」

依姫の一閃、今度は斬るではなく叩くようにして斬りつけてきた、輝夜はそれを跳躍で回避する。
目標がが無くなった攻撃はそのまま床に叩きつけられる、その一撃で床に衝撃が走り、逃場がなくなった場所から破壊されていく。

「今のを避けるとは……本当に強いですね」

「危ねぇじゃねぇか！！殺す気か！！！？」

輝夜は顔を真っ青に変えて言う、それだけ危なかったらしい。
だが依姫は至極真面目にこう答えた。

「殺す気でやらなければ貴方には勝てませんからね」

後に語る、あの目は獅子の類よりも上の何かだったと……
……

「はぁ……なんでこうなっちまったのか……普段なら今頃パフェ食べてテレビ見てパチンコ行ってたのに何でこうなったのかな～」

「……一つ聞いてもよろしいですか？」

依姫は静かに呟いた、だがその目は何かに怒っているようだった。
まるで自分の誇りを他人に踏みにじられたかのように……
……いや、実際にそうなのだろう……輝夜の行動や言動の全
てが……〝月人であると言う事の誇り〟を汚している事に……
……無意識からなのか自分の意思でやっているのかはわからない
が間違いなく馬鹿にしている、いやそれよりももっと酷い、けなし
ている。

「貴方は月人の誇りをどう思っていますか？」

「はっきり言っちまえば馬鹿のような考えだと思うぜ」

輝夜はその言葉をはっきりと言っていた。
月人の誇りをあっさりと馬鹿にした。

「今更だがよ〜、月人と地上の人間って大差なくねぇ？」

「そうですか……では……」

依姫は構えを取り……

「その考えを否定し強制し叩きなおします」

その瞬間、依姫が消えた、比ゆでもなく実際に行動して……

何処に消えた、それは簡単だ、上……

ガッキィィイイインンンンン！！！

……ではなく下。

依姫は音速を超える速さで十回ほど輝夜の木刀にぶつけた。
輝夜は全ての斬撃を受け流しながらも、その衝撃で壁に激突した……
……壁はその際壊れてしまったが。

「ガハ！！……てめぇ、いきなり何をッ！！」

壁に叩きつけられた輝夜の目に映ったのは……

無数にある光る光弾だった。

「永琳様～、なんで私をここに連れてきたんですか？」

「駄目よ、豊姫様は少し可笑しくなってらっしゃるから…………すぐに戻さないと」

あの後、何故か（ここ強調！！）！！理由もなく（ここテストに出るよ！！）！！！永琳に連れて行かれた豊姫は椅子に座らせられ紐で雁字搦めにされていた。

永琳は怪しげな薬品をある物と混ぜ合わせていた、そしてそれをフライパンに流し込む。

何かがくすぶる音が聞こえる、そして何かの悲鳴も…………まるでＦａｔｅのこの世全ての悪（アンリ・マユ）すら越える何かが混ざり合ったような悲鳴だ。

「それで永琳様、何を作っていらっしゃるのですか？」

「何って…………卵焼きよ」

「ヒィイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！！（泣）」

今までずっと笑顔だった豊姫の顔が恐怖に染まってしまった。
一体どれほどの絶望なのか！！！つかマジで死ねるような匂いが立ち込める……悲鳴もさらに酷くなる……

「何でそこまで怯えるのよ……まぁいいわ」

永琳は出来た……否、出来てしまった……
卵焼き？を皿に盛り付けていた。
……絶対に見間違いだ、卵焼きが真っ黒く手のような物が出てて更にはうめき声や緑の液体が出てるなんて……
……絶対に見間違いだ！！！！認めない！！私は断じて認めない！！！！

「ねぇ、豊姫様……貴女は輝夜様の事をどう思ってます？」

永琳は唐突に豊姫の名を言った。
その顔は少し難しく、たとえてしまえば子を心配するような親の顔なのだ。

「良い子だと思います、他人を思いやれる……心が優しくて、とても強い子です」

豊姫が優しい声で言う。

「ええ、才能もあって人を思いやれる、不器用だけどね」

「それに今回の練習試合も輝夜の力を解放させるためでしょ？」

「分かってましたか」

「ええ、神降ろしに霊力の操作、少なくともあの子にはそれだけの課題が残されているわ」

豊姫は少し嬉しそうに笑った。

「まぁ霊力に関してはすぐに使えると思うわよ、強さはともかく……」

永琳はそう言って……黙り込んだ。

あの不真面目な輝夜の霊力だ、どのくらい濁ってるのか分からなかったのだ。

「ギャァァァアアアアアアアアアアアア！！！！！」

輝夜は叫びながら逃げていた、何に？　依姫様の霊弾攻撃にです。
ちなみに依姫様の霊弾は木刀に乗せて突きを使って霊弾を飛ばします、無論その威力は圧倒的です。
何せ依姫様の霊力と突きによる威力相乗効果が出てますから……
……

つまり必死になって避けてるわけです、分かりやすい。

ぶっちゃけ並の弾幕より遥かに強い斬撃、もとい突撃はあまりにも桁違いすぎる。
雨よりは少ないがそれが振ってくる、命を懸けて逃げないと殺される。

「お前殺す気かぁぁぁあああああああああああ！！！！」

「ええ、殺す気です」

依姫の顔は冷淡……表情すら感じぬ人形のような顔になっていた。
その顔を見て輝夜の顔はかなり引いた顔つきになった。

「マジかよ……」

「貴方は月人の誇りを汚しました」

「はっ？」

輝夜にとってはどうでもいいこと、だが依姫にとっては、いや、月人にとってはとっても重要な事。

「地上に住む人とは違う、穢れが無い私達月人の方が遥かに勝っています」

依姫はそれが誇らしいと思っている、ただし輝夜からだんだん顔の力が抜けていく。
依姫はどんどん話していく、ただし輝夜は鼻を穿るのに夢中で全く話を聞いていない。

「ですから、私は……って聞いてますか？」

「ん？ぁあ、やっぱあれだな、豊姫はやっぱり太ってるってことだな」

「ぜんっぜん！！話を！！！聞いて……ないじゃないですかあああああああああ！！！」

依姫は木刀に霊力を乗せて叩き込んだ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ」

漫画とかでよくある力ってそう簡単には目覚めない、目覚める奴はご都合主義だ

かなり遅くなってすみません、色々と用事があったのでかなり遅れました。

漫画とかでよくある力ってそう簡単には目覚めない、目覚める奴はご都合主義だ

前回までのあらすじ♪

依姫の気に障ったため殺されかけている元坂田銀時、現蓬莱山輝夜

……。

依姫の持つ力、霊力に悪戦苦闘♪さてどうやって死ぬ？

「死ぬかァァァアアアアアアアアアアッ！！！！」

お、どうやら必死に逃げているようですね、まぁガンバレ！

「ふざけんなぁぁぁぁあああああああああ！！！！」

じゃぁあらすじもここまでにして本編にいきましょう！！

「ギャアアアアアアアアアアアッ！！！！」

輝夜が必死に逃げていた、何に？決まっている、霊力が篭った斬撃からだ。

マシンガンのように放たれる霊力の本流、そして簡単に穴あきになる床……少なくとも、並みの道場ならすぐさま専門の業者を呼ばないといけないような壊れ方だった。

「あぶねぇええ！！！！」

必死に逃げ惑う輝夜！！それを歩いて追いかける依姫！！

何だろう、必死に逃げているのに気がついたらすぐ後ろに居る感じだ……。

「はッ！！！」

輝夜はすぐ後ろから声がしたので振り向いた、そこには淡い光が燈った木刀を振り上げ宙に浮いていたよ姫だった。

そしてその木刀を振り下ろそうとしている、誰に？輝夜に……。

「くッ！！！」

輝夜も木刀を振るう、そして辺り一面を光が包み込んだ。

木刀同士がぶつかり合い爆発した、折れたのは……輝夜の木刀だった。

依姫の木刀は勢いを衰えずにそのまま輝夜の腹に直撃した。

「がはッ！！」

壁に激突し、血を吐いた。

依姫はふわふわと軽く浮いてるように着地した。

「いつつ、木刀が折れちまった……」

折れた木刀を死んだ魚のような目で見つめる輝夜……、そして光る木刀を振った依姫……。

「じゃぁトドメですね」

そう言って近づいてくる依姫、それを見てマジでビビるマダオ、もとい輝夜。

「ちょっと待てって！！何で俺に向けてそんなに殺意むき出しなの！！？」

「貴方が月人の誇りを汚したからです」

「はっ？」

輝夜にとってはそれだけ、だが依姫にとっては……月人にとっては大事な事だ。

穢れ

それは月人にとって最も忌むべきものである、そして人が人として居られる為に最も必要なもの……。
穢れとは毒、だが絶対に必要なものでもある。
その穢れとは不純な欲求、もしくは……恐怖。
恐怖そのものである妖怪は穢れの塊、それを突き止めたのが天才科学者、八億永琳だった。

人間は穢れを捨てる為に月に行こうとした、その際におきた妖怪との戦争、人妖大戦争だった。
その戦いで人間達の一部だけは月に行く事が出来、地上に残った人と妖怪は限りなく少数になってしまった。
だが、月に行った人間の九割以上がお偉いさんだった。

だから、月人が地上に住む人間をさげずみ始めたのだった。
それは至極当たり前、なぜなら自分達は穢れの無い月人、向こうは穢れている人間……こっちの方が優れているのは当たり前……
そう思い始めたのだから。

依姫もその一人である。

それに依姫も本気で殺すつもりであったわけではない、輝夜がその発言を撤回すれば許してやらない事も無かった。

だが輝夜の言った言葉は……

「いや、だから？」

「はっ？」

「いや、だからどうしたって」

輝夜にとってはどうでも良かったのだ、月人の誇りも……

「人の価値観なんて人それぞれだろ、別に他人にそこまで押し付けなくてもいいんじゃね？」

まさに正論、こんな小さい子供に当たり前な事を言われて気付いている可哀想な大人、依姫は……

「ええ、そうですね！！ただ単純に気に入らないからです！！ええそうです！！」

そう言って斬撃を飛ばしてきた。

「ギャァァァアアア！！！」

避けなかったら絶対に真っ二つになっていたであろう………

そして輝夜は気付いた！！

「そういえば何で木刀が光ってんだ？」

「気付くの遅いですよ！！今までそれを言われるのを待ってたんですよ！！」

「えっ！そうだったの？」

「ええそうですよ！！聞かれなかったから攻撃を続けていたんですよ！！まぁ、訂正はさせますが………」

そう言いながら怒る依姫。

「じゃぁ教えてくれよ、年増」

ドスドスドス！！

「ギャァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「黙りなさいクソ餓鬼」

今のは輝夜が悪い、うん……女性にそれはねぇわ…………

「まぁ簡単に説明します、霊力とは霊的資質が見える事、それが霊力です。この力は使い続けなければ大人になる頃には消えますが使

い続ければ死なない限り成長します、まぁ大人になっても消えない例外もありますが……」

その言葉を聞いて輝夜は顔を真っ青に変えた。

「いやいやいや、そんなの見えないからッ！断じて居ないですから！！！」

「あれ？もしかして苦手なんですか？」

輝夜が顔を真っ青にし、体から汗を流す。依姫はそれを可笑しそうに笑う。

今まで変に大人っぽくまるで駄目な大人、略してマダオのような性格だったが逆に子供っぽい部分がある事に安心して笑っていた。

以外にも心配していた依姫に対し輝夜は必死に居ないといっている。

「あれは霊じゃない！！スタンドだ！！！」

「はいはい」

「笑うんじゃねぇえええ！！！」

輝夜が自身の中では凄い形相？で依姫に言うが全く説得力がない、むしろ可愛いだけだし……。

「で、今さっきやったのが強化と言う力です、霊力を木刀に流す事で物質を硬化させる事が出来ます、振るうときに霊力を爆発させれば斬撃として飛ばす事が出来ます」

そう言うと木刀に淡い光が燈った。

「イメージとしては武器に何かを纏わせるような感じです、恐らく貴方でもできる簡単な事です、やってみてください」

「あ、ああ……」

そう言って輝夜は柄だけとなった木刀に霊力を込めた。

「（イメージしろって言われてもな、武器に纏わせる感じって・・・・・・・・言われてもな～）」

と、輝夜は考えていた。

「（やっぱそういうのは苦手だ、俺には向かねぇな・・・・・・・・・・なら、俺は）」

ドクンッ！！と、何かの鼓動音がした。

それに呼応し柄だけとなった木刀に銀色の光が燈る……、そして白い衣が輝夜を包み込み柄だけとなった木刀に刃が出来る。

「具現化だなんて……なんて才能……」

依姫は輝夜の才能を畏れた。

輝夜は具現化された刃で切りかかってきた。

依姫はそれを真正面から受けた、いや、受けてしまったのだ。

強化された木刀はバキッ！！とへし折られ打ち負けた。

依姫は破壊された木刀を見て唖然とし、迫り来る木刀に目をつぶった。

――――――――――――だが、いつまでたっても衝撃は来なかった。

「なんで？」

目を開けると気絶している輝夜が居た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6935v/

東方銀月伝

2011年10月16日19時55分発行